

論文要旨

文学史上における阮籍「詠懐詩」の位置

鄭 月子

中国文学において、唐詩の到達が中国詩の一つの頂点を作っている。その唐詩が花開く土壌となったのが六朝期に生まれた文学である。この間、文学がさまざまな可能性を広げていった。阮籍（二一〇～二六三）は、六朝期において極めて突出した詩人である。彼の文学を語る上で、八十二首からなる「詠懐詩」を考慮の外に置くことはできないだろう。「詠懐詩」はその独特な作風ゆえ、歴代の読者を魅了してきた。

本論文では、後世における受容に視点をすえ、「詠懐詩」の持つ独自性が中国文学の中でどのような役割を果たしたのかについて考察することを目的とする。

二部構成である。第一部は、「阮籍「詠懐詩」にみる時間の特質」、「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(一)」、第三章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(二)」の三章からなる。第二部は、「「詠懐」と「言志」」、「六朝期における阮籍「詠懐詩」の受容」の二章からなる。

第一章「阮籍「詠懐詩」にみる時間の特質」では、「詠懐詩」の表現に現れた時間把握の特質に主眼を置いた。時間は、過去から現在そして未来を無窮に流れるものとして予め見なせないでいるため、不安定なものとして作品に緊張感と緊迫感を加えるものとなっている。極めて独特な認識の元において詠出されている。いつ閉ざされるのかわからない時間把握を写し取った「一日復一夕」という表現は、後世に受け継がれていく。しかし、踏襲されたのは表現のみで、「詠懐詩」に現われていた特殊な認識は受け継がれることはなかった。ある意味において他者と共有されることのない時間意識、生命意識を下支えとする表現が独特な世界を構成し、阮籍詩に固有の色彩を与えたのだと分析した。

第二章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(一)」では、空間に焦点を当てた。「詠懐詩」全篇をとおして、言葉によって二つの空間が描き分けられているように見受けられる。人間界（主人公が身を置く俗世）と仙界（俗世から隔たった空間）である。両空間は、それぞれ正・負、善・悪のイメージによって形成される。仙界はちょうど人間界における負、悪が排除された完璧な空間となっていることを論じた。

続く第三章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(二)」では、主人公の逃避という行為をとおして浮かび上がる「場」に焦点を当て、主人公が生きる空間を更に詳しく考察した。「詠懐詩」は逃避を詠った作品が多い。そうした逃避の原点、起点に目を向けると、ある一つの「場」が浮かび上がる。主人公はその「場」にいま身を置き、そこから空間においてあるいは時間において異なる世界—神仙世界（あるいは神仙世界に準ずる隠士が住まう世界、方外、上世）への逃避を志向する。主人公が生きる「場」に目を向けると、それまでの作品とは異なる性格が認められる。時間を感じる苦痛は、主人公が身を置く「場」の劣悪さとして収められている点が特徴的である。自らが生きる「場」を苦悩に満ち溢れるものとして強く意識するところに作品としての特質が見出される。

第四章「詠懐」と「言志」では、「詠懐」と呼ばれるところから浮かび上がる阮籍詩の受容のあり方を考察した。阮籍詩をめぐる言説の中に、「言志」という言葉がしばしば顔を覗かせる。しかし、阮籍詩は「言志」と結びつくことなく、「詠懐」と呼ばれるようになり、この呼称が定着する。先行研究では、「詠懐」の「懐」により重きを置き、その意義を論じようとした。本章では「詠」のほうにも目を向け、それによって喚起される行為としての表出の特質に目を向けた。他者に伝えることを目的としない、あるいは第一義としない阮籍詩の表出が、「詠」という文字によって上手く表現し得ていることを論じた。

第五章「六朝期における阮籍「詠懐詩」の受容」では、第四章とは異なる角度から阮籍詩の受容を考察した。江淹と庾信は阮籍詩を対象とした模擬作を残している。両者の模擬のあり方に特質が見出される。江淹「効阮公〔阮籍〕詩十五首」は、阮籍詩を再現すること、すなわち語彙、モチーフ、構成を意識的に模倣するのみにとどまらず、江淹自身の思い、感慨を表出する場となっていた。庾信もまた、思い通りに生きられなかった自らの人生、祖国の運命をふり返る作品群に「擬詠懐詩二十七首」と名付けている。ともに阮籍詩を模擬の対象として取り上げ、その模擬作はいわゆる模擬の規範の枠組みを越え完成される。そして、作者の胸懐を写している点において共通する。受容の過程において、阮籍「詠懐詩」は作者の内面を写し取る文学として展開していった様相が見てとられる。

全五章にわたって、阮籍文学の有する個性がやがて一つの詩作スタイルとして定着し、受容の過程において後世にどのような影響を与え、そして、文学史上においてどのような位置を占めているのか、一つの方向を提示することに主眼を置いた。